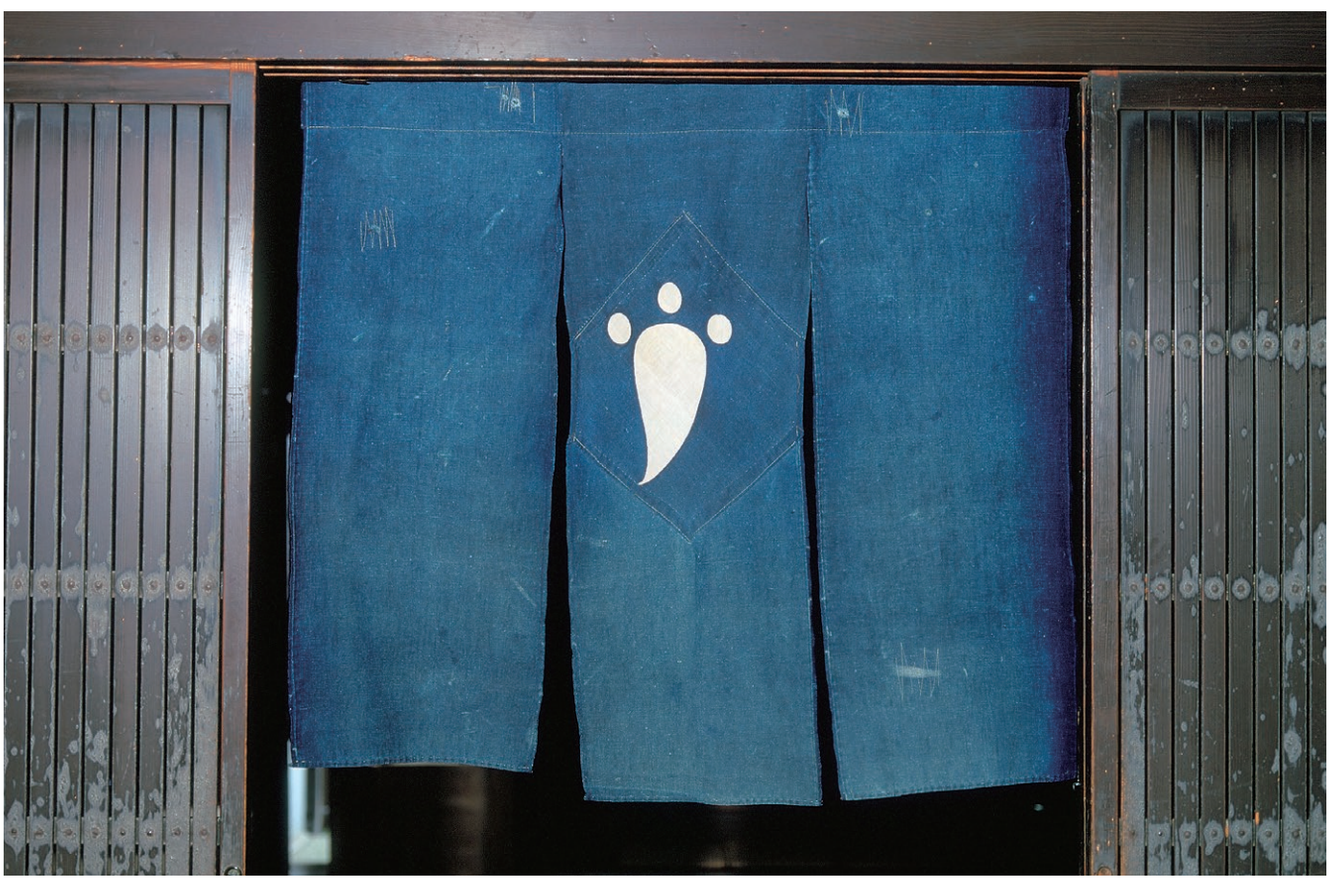
近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

三方よし（さんぽう）

第４７号
2021／8

特別寄稿　多事多難な幕末維新期を生き抜いた近江商人（前編）

同志社大学名誉教授・近江商人郷土館館長　末永　國紀



館内にかかる丁吟の丁子花の商標を染め抜いた暖簾

江戸時代からの豪商・小林吟右衛門家は「丁吟（ちょうぎん）」と呼ばれ、江戸や大阪で織物卸業や金融業を営み、現在のチョーギンの前身。郷土館は、資料館と生活館に分かれ資料館では、帳面類・看板など店の様子や商用具の展示や近江鉄道創設の経緯や桜田門外の変に関する記録が展示。小林家当主の商訓は、近江商人の一端を知るうえで興味深い。

近江商人郷土館
所 在 地：東近江市小田苅町473
休 館 日：月、水、金曜日、冬季（12月１日～２月末日）
営業時間：10：00～16：00
料　　金：大人500円、高中生300円、小学生100円
団体割引は20人から（要予約）
駐 車 場：普通車10台、大型車２台
アクセス：JR琵琶湖線能登川駅からバス小田苅下車５分
名神高速八日市ICから15分
お問い合わせ先：TEL.0749-45-0002

近江商人郷土館前景

多事多難な幕末維新期を生き抜いた近江商人（前編）

今日の世界規模のコロナ禍は、すでに足かけ二年におよび、人びとの日常生活の鬱積には、はかり知れないものがある。容易に先の見通せない時代であることが、社会に一層不安や動揺、混乱をもたらしている。

鬱屈の霧に包まれたような近頃の世相を、客観的に映し出す鏡の役割を歴史に求めることは、心の静穏をもたらす一服の清涼剤ともなるであろう。

ほんの170年ほど前の黒船襲来に始まる幕末維新期は、四半世紀にも満たない短期間に、疫病コレラの蔓延をはじめ多事多難な出来事が次々に突発生起した。そのなかを生き抜いた先人、近江商人の足跡を史実に則してたどることにしよう。

1　黒船騒動

嘉永六年（一八五三）六月三日（西暦七月八日）朝、蒸気船二隻、帆船二隻からなる黒塗りの艦隊が、突然に伊豆半島沖にあらわれ、相模湾を八～九ノットの高速で突っ切り、江戸湾入り口の浦賀町の沖合に停泊した。これらは、アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーの率いる蒸気軍艦の旗艦サスケハナ号（二四五〇トン）とそれに曳航される帆走軍艦サラトガ号（八八二トン）、蒸気軍艦ミシシッピ号（一六九二トン）とその帆走軍艦プリマス号（九八九トン）の四隻で、大砲七〇門を装備したまま、江戸湾入り口まで侵入した。

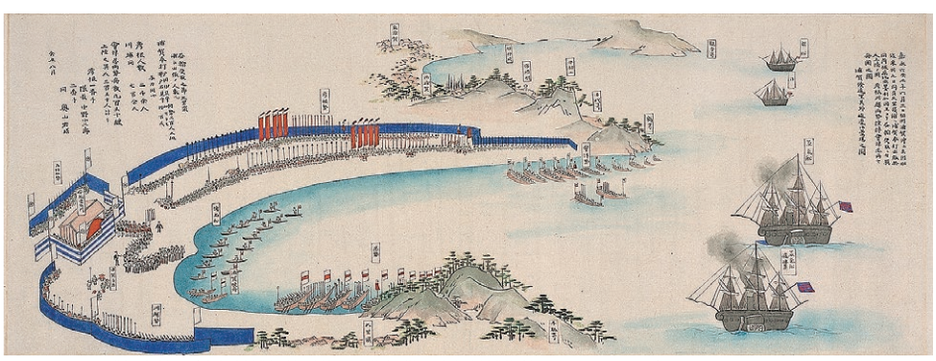


図１　ペリー浦賀来航図（彦根城博物館所蔵　画像提供：彦根城博物館／DNPartcom）

旗艦サスケハナ号は、当時の最大の海軍国イギリスにもないような、最新鋭の軍艦であり、日本のもっとも大きな千石船の約二〇倍の大きさがあった。まさに、巨大な黒船の襲来である。

ペリーは大統領フィルモアの国書受理を求めたが、江戸幕府はそれを拒み、外国との応接地の長崎への回航をうながした。

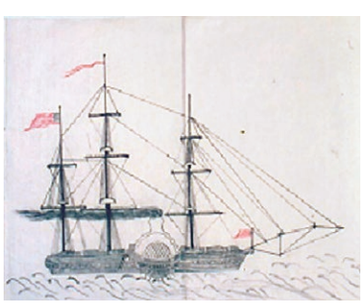


図２　黒船サスケハナ号
（『北亜墨利加合衆 国軍船一件』より）

しかしペリーはそれを拒否したので、幕府は六月九日、浦賀近郊の久里浜（くりはま）で国書を受け取り、ペリーは翌年の再来航を告げて浦賀を去った。

この黒船来航は、鎖国太平の夢の中にあった全国民を一挙に恐慌状態におとしいれた。

陣羽織異国からきて洗い張り
ほどいてみれば浦（裏）賀大変

具足より利足にこまる裸武者
すね当てよりもお手当がいい

これらの狂歌は、黒船騒動で内外に断固たる決意を示すことの出来なかった江戸幕府への失望と同時に、支配階級の武士への人びとの信頼が薄れていったことがうかがえる。

それ以来、鎖国体制を維持できず、和親条約を結んで開国を余儀なくされた日本国内は、幕末維新期の大動乱期に突入していった。この激動期に台頭した近江商人の一人が、愛知郡小田苅村出身の丁子屋屋小林吟右衛門家、商号、丁吟（ちょうぎん）である。

丁吟は、天保二年（一八三一）に江戸日本橋堀留町に呉服太物問屋を開店（店名前、丁子屋吟次郎）し、商いは呉服方（商内方）と金方（為替方）から成り立って

いた。同一三年には京店（店名前、丁子屋吟三郎）を六角通柳馬場堀之上町に開店して、呉服太物・紅花等を商った。小田苅本宅と江戸店、京店の間では、活発な商況報告が交わされた。嘉永六年六月の黒船来航の報知は、江戸店から京店を経て本宅へもたらされたことはいうまでもない。ペリー艦隊による翌嘉永七年（安政元年）正月の再来航も、丁吟では同年正月二五日の江戸店徳兵衛から本宅宛の書簡で正確に報告されている。

2　安政の大地震

安政二年（一八五五）一〇月二日夜四ッ時（西暦一一月一一日、午後一〇時頃）に起きた江戸大地震（安政大地震）は、マグニチュード六・九の直下型地震であり、震源地は江戸の真下にあった。

異常なくらいの人口集中地帯であった江戸市中の下町（町人居住地）は、大きな被害を受けた。激甚な被害を受けたのは、深川・本所・下谷・浅草を中心とする地域であった。倒壊した家は、一万四三四六戸に上り、地震後に発生した火災によって、一四町（一・五キロ）四方の家屋が焼失した。地震による死者は、七〇〇〇～一万人と推定されている。津波の被害はなかったが、江戸近郊には田畑に山や沼を生じたという。水戸藩士の藤田東湖（ふじたとうこ）が、母親を救おうとして小石川の水戸藩邸で圧死したのもこの時である。

江戸ではこの大地震の直後から、絵入りの号外である大量の災害かわら版や「地震なまず絵」が出版された。グラグラと揺れて家を圧壊し、火事を発して総てを灰にしてしまう地震は、地中の大なまずが暴れて起きるものとの俗信があったのである。

かわら版の売初めは一〇月四日であり、「地震火事方角づけ」という地震で倒れたところや出火場所を示した方角づけの情報紙が争って求められた。また、「関東類焼大地震」と題するかわら版は、寝入りばなを地震に襲われ、猛烈な火災に囲まれて逃げ場を失った人々の様子を描いた地獄絵であり、「地震後野宿の図」では、大地震を生き延び、類焼を免れた人々が、余震が続くので、家からタタミ・ふすま・しょうじを持ち出して野宿生活をしている様子を描いている。

大災害や大事件はこの種の印刷物によって、そのつど津々浦々にまで伝えられたのであるが、この安政大地震は、黒船の来航や外国との和親条約が相次いで結ばれ、人心の動揺が激しかった時期に起こったため、人々に与えた衝撃は強烈であった。

この大震災による丁吟江戸店の被害は、建物も壁も屋根瓦も崩れ落ち、柱ばかりが残り、天井は空が見えるようになって、店の中央部分はつぶれてしまうほどのものであった（以下、『店要記録帳』近江商人郷土館蔵）。幸いにも、ケガ人はなく、とりあえず商品を六艘の舟で桐生・足利の取引先六軒へ預け、約一ヶ月後には仮普請で営業を再開した。

江戸店の本格的普請が完成して、安政五年（一八五八）一一月一九日に引っ越しの予定で得意先に完成披露の案内を出し、いよいよ一六日より品物を運び込もうという前日の一五日、またもや江戸の大火によって新築の江戸店は類焼し、大見世・土蔵・台所・仮家などすべてを焼失した。

この江戸店の普請は、地形・石据・木口・瓦等を厳選し、江戸一番とのうわさもたつほど念を入れたものであった。それが一夜にして焼失しただけに店員一同の心中は、「誠に残念至極、一統落涙つかまつり候」と書き遺されている。ただこの火事でも幸いに商品の被害はなく、ケガ人も出なかったので、丁吟では再度仮宅を設けて再建に努め、文久元年（一八六一）六月に新築引っ越した。

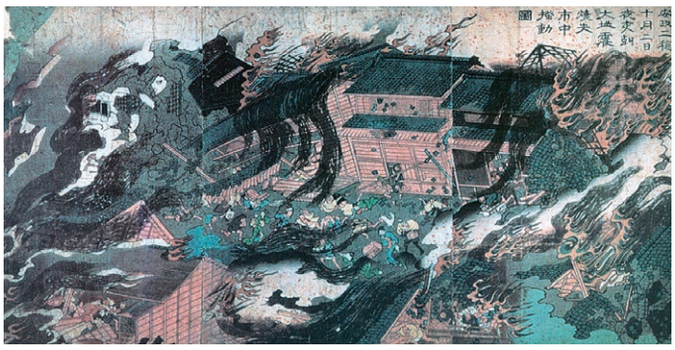


図3　安政二稔十月二日夜亥刻　大地震焼失市中騒動図（東京大学地震研究所蔵）

3　安政のコレラ

江戸時代の人びとは、疫病（流行病）に対しては全く無力であった。特に天然痘や麻疹（ハシカ）は恐ろしいウィルス性の疫病であり、しばしば大流行したが、安政五（一八五八）～六年にかけては新しいウィルスによる疫病が大流行した。コレラである。当時の人びとは、短期間で絶命する症状から、コレラをコロリ、三日コロリ、トンコロリなどと呼んだ。

元来はインドのガンジス河流域の地方病だったコレラは、西洋との交易の拡大にともなって、世界的な規模で流行を繰り返すことになった。日本にはじめてコレラが入ったのは、文政五年（一八二二）八月下旬（西暦一〇月中旬）のことである。この時の流行は、長崎からはじまって、九州、中国、近畿地方に大きな被害をもたらしたが、一〇月（西暦一一月下旬）に入ると急速に終息し、箱根を越えなかった。三六年後の安政五年になると、コレラは全国にわたって爆発的に大流行した。この安政のコレ

ラは、文政五年のコレラと異なり、予告があった。

長崎に滞在してオランダ医学を学んでいた松本良順（後の初代軍医総監）は、師の同国軍医のポンペから、「上海ではコレラが大流行している新聞報道があるので、やがて日本にも伝わってくるであろう。日本にはこの病気に対処する用意があるだろうか。」、との懸念を示された。以後、コレラ感染が実際に始まると、ポンペとその門下生たちは治療に全力を傾けることになる（山本俊一『日本コレラ史』）。

コレラ患者発生のきっかけは、安政五年五月二一日（西暦一八五八年七月一日）に長崎へ入港したアメリカ軍艦ミシシッピ号である。清国でコレラに感染して発病した乗組員がいたために、コレラが長崎に上陸したのである。

六月二日（西暦七月一二日）には、長崎市内の罹患者は三〇人に上った。その後、流行は拡大し、六月下旬（西暦八月上旬）に東海道、七月（西暦八月中旬）には江戸に到達した後、八月上旬（西暦九月中旬）には全国流行の様相を呈した。なかでも大坂の流行は、八月中旬（西暦九月下旬）から激化した。

当時の江戸の町名主で考証家の斎藤月岑（一八〇四～一八七八）は、著書『武江年表』という江戸の地誌のなかで、このコレラに罹患した患者の症状を「即時に嘔吐と下痢をもよおし、手足は冷たくしびれて、たちまち絶命する」と、壮絶な病勢を記している。

図4　コレラから回復した患者（『国史大辞典』６より）

このようなコレラの特徴は、病状の急速な進行性と致死率の高さであっただけに、罹患者の大量死をもたらし、埋葬が追い付かないというきわめて深刻な混乱を引き起こした。焼き場では火葬が間に合わず、大量の焼け残りが出た。夏季のことでもあり、死臭がただようので、ついに寺社奉行は八月に仮埋葬の許可を出す事態となった。コレラによる江戸の死者数は確かなことは不明である。少ない場合は三万余であり、多い場合は二六万余と伝わっている。

黒船来航による開国と、それにともなう開国と攘夷の政争に加えて、安政の大獄のただなか、大地震につづいて疫病が蔓延したのである。医者もコレラの病因についての知識を持たず、この社会不安のなかで流言飛語が飛び交い、迷信やまじないが流行った。例えば、コレラは外来の疫病ということは知られていたので、その原因は日本を外国に開放したために、入国した異国人が井戸に投げ込んだ毒物に起因するとして、異国人迫害の騒動が起きた。

コレラが流行った安政五年八月の京都の様子を、京都出店を持つ小杉甚右衛門を主家とする近江商人小杉元蔵の旅日記は、次のように観察している（佐藤誠朗『近江商人幕末・維新見聞記』）。「京の家々では、八月二一日の日暮れから夜八時ごろにかけて、門口に南天の葉を敷いて小糠を二、三合盛り、小糠が焼け切るまで梅香をたいた。誰が言い出したのかわからないが、三日コロビ病が来ぬようにとのまじないだという。……梅香をたいた家から、数知れぬ死人が出た。町内でも、三日コロリで五、六人も死んだ。だが、梅香焼きをしなかった主家の家では、一人も死ななかった。誠に世上のすることは、あさましき事也と、元蔵は感じ入った。」（同書）

翌安政六年（一八五九）の夏にも、コレラは流行り、疫病神を追い払うために、各地でいろいろなコロリ祭りが催された。元蔵の日記は、京都でのコロリ祭りの様子を次のように記している。「京では、御千度参りの踊りと称して、六月上旬から八月下旬まで、町ごとにさまざまな細工提灯をともし、ものすごい山車をこしらえ、縮緬の襦袢を着けたり、浴衣や半纏などにとりどりの模様を付けたり、若者や子どもも加わって、毎夜、毎夜踊りながら、祇園社の牛頭天王に参詣した。とりわけ七月二五日ごろから八月二日まで、洛中は皆踊った。また上京は御霊社や北野社へ、下京は稲荷社へ詣でた。」（同書）

丁吟では、安政五年九月五日発信の小田苅本宅宛の江戸店書簡において、「先月からコレラが流行し、毎日たくさんの病没者が出て心配している。しかし、当店ではお蔭をもって一人の罹患者も出たことはないので、安心してもらいたい。いまだ少々はコレラの病人はあるものの、先だってのような流行は薄らいできている」、と報じている。

翌安政六年のコレラ流行時には、本宅のある小田苅村でも七〇人ほどのコレラ患者が発生し、そのうち一〇人ほどが死亡したという本店からの書信に対して、京店側が悔やみを述べている（安政六年七月二三日発信の本店宛京店書簡）。また、同年八月九日の江戸店在店中の当主二代目吟右衛門から京店と本宅へ宛てた書簡では、江戸店でもコレラ患者の出たことを次のように詳報している。「当店の店員にも六人のコレラ感染者が発生したが、下しせん薬の丸薬を用いたところ、全員早速全快した。京店でもこの薬を処方すればよいと思っていたが、京店では一人の感染者もいないということで安心した。当地ではコレラ病人の

図5　小林吟右衛門画像（2代目）

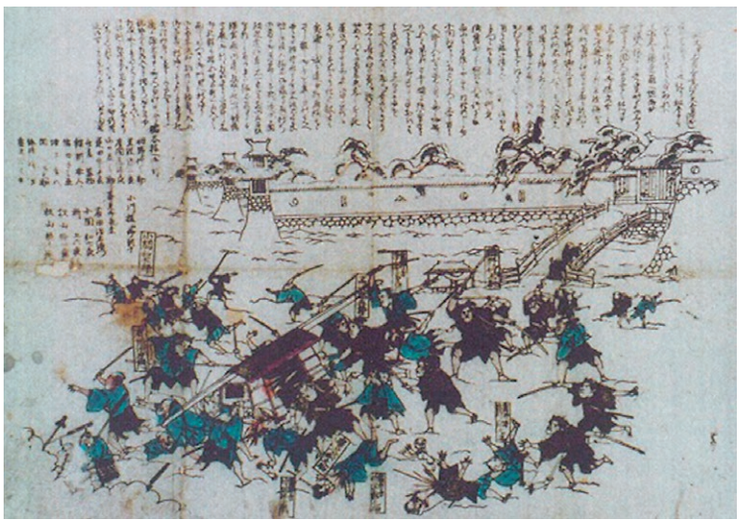


図6　かわら版　桜田門外の変（山名新聞歴史資料館蔵）

葬式が毎日あるので、とりわけ医者は多忙である。早く季節が移って、冷気がもたらされ、流行病が治まるように祈っている。」

コレラ禍のなかにあっても、丁吟の江戸店、京店、本宅では、病死者は一人も出なかったのである。

4　桜田門外の変

安政五年（一八五八）六月一九日の日米修好通商条約調印の後、同月二二日に幕府は諸大名に江戸城への登城を命じ、勅許を得ずに調印にいたった旨を説明したが、同月二四日、徳川斉昭（水戸前藩主）・徳川慶篤（水戸藩主）・徳川義勝（尾張藩主）らは井伊大老（彦根藩主）に違勅の罪を問うために無断登城した。しかし井伊は逆に七月五日、斉昭らを押しかけ登城の罪で隠居・謹慎などに処した。

他方で、条約無断調印は孝明天皇を憤慨させ、浪士たちの朝廷・公卿への働きかけが活発化し、八月八日三家以下諸大名の「衆議」を求める勅諚（天皇の命令）が幕府と水戸藩へ下された。これをきっかけに九月、京都で浪士弾圧を目的とする安政の大獄がはじまり、吉田松陰ら六九名が処罰された。

条約調印について理解を示した孝明天皇は、水戸藩に下した勅諚を取り戻すように幕府へ命じた。水戸藩主の斉昭父子の処分直後から、急進派の結集が始まっていた水戸藩では、この勅諚返納をめぐって藩内を二分する激しい対立をひき起した。勅諚返納に反対する急進派も斉昭による解散命令を受け入れたが、桜田門外の変は、返納にあくまでも反対した水戸藩脱走者に薩摩藩の有村次左衛門が加わって決行されたものである。桜田門外の変の斬奸状（犯行声明書）には、ペリー来航以来の幕府の諸政策と安政の大獄による弾圧を列挙し、「公論正義」を踏みにじった井伊を誅伐する旨が記されていた。

安政七年（万延元年一八六〇）三月三日の大雪の朝、水戸・薩摩の一八人の浪士が、登城する大老井伊直弼を江戸城桜田門外で暗殺した「桜田門外の変」は、同日夜五つ時（午後八時）に手紙に認められ、丁吟江戸店から京店へ仕立便（臨時速達便）で通報された。

この第一報は三月七日午半刻（正午）に、わずか三日半で丁吟京店に到達した。当の彦根藩でさえ、江戸藩邸から国元の彦根城へ変報が藩士二人（大久保小膳・高野瀬喜助）の早駕によってもたらされたのは、三月七日の夜半であったというから、丁吟の情報入手の迅速さは際立っている。

この変報は、八日には彦根城下全体に知れ渡った。彦根藩では、藩主が白昼に公道で暗殺されたとあっては、お家の取り潰しにもなりかねなかったので、当座の体面を重視する幕府の命にしたがって直弼の死を秘密にし、一旦、手傷を負ったが帰邸したという虚偽の届を幕府に出し、同月二八日に病状があらたまって死去したと報告した。しかしこの虚偽の届出が、政治情勢が変わった後年に、彦根藩処罰の理由づけにされたのである。

幕府の最高権力者の暗殺という事態は、人々に幕府の支配者としての権威が地に墜ちたことを示す出来事であった。この時、彦根藩の政治的活動を側面から支えるという藩と密接な関係にあった丁吟では、直弼暗殺の報知を受けて、即座に約一万五九〇〇両を当座の資金として彦根江戸藩邸へ調達した。

5　和宮下向

和宮親子内親王（かずのみやちかこないしんのう）は、仁孝天皇の第八皇女で孝明天皇の妹にあたる。嘉永四年（一八五一）六歳の時、有栖川宮熾仁親王と婚約するが、安政五年（一八五八）秋、日米修好通商条約の条約勅許問題や将軍後継問題をめぐる朝幕間の対立を和らげるために、和宮と一四代将軍家茂との婚姻論が幕府内に生じた。

孝明天皇は、有栖川宮との婚約や幼少であることを理由に一旦拒否したが、国政上の大問題は朝廷に奏聞して決定し、公武一体を図るという岩倉具視の献策を容れ、攘夷鎖国の実行を条件に降嫁を承諾した。降嫁承認の具体的条件は、幕府がアメリカなど五ヶ国と結んだ条約を破棄することであったが、老中らにとって一旦結んだ条約は、外国との力関係からしても、また国際間の信義の面でも容易に破棄しえないことは明白であった。

けれども幕府は、公武一体を優先させ、一〇年以内に交渉もしくは武力によって、条約を破棄することを約束したのである。こうして万延元年一〇月一八日に和宮降嫁の勅許が下った。

翌文久元年（一八六一）一〇月二〇日、和宮は京都を発ち江戸へ向かった。宮の輿の警護には一二藩、また沿道の警備には前後二九藩があたり、厳重な警戒態勢が敷かれた。

数え年一七歳の和宮の心境は道中に詠んだ、次の和歌に滲み出ている。

住み馴れし都路出て今日幾日
急ぐもつらき東路の旅

また、美濃国の川を渡った時、土豪の馬淵某から手渡された一葉の紅葉を見て詠んだ歌にも心情が吐露されている。

落ちて行く
身と知りながら紅葉葉の
人懐かしくこがれこそすれ

和宮の江戸への行程は、浪士不穏の情報が流れていたため、治安の上から中山道が選ばれた。下向の日取りが決まるや、中山道の宿駅は普請作業でごった返した。一〇月一九日から往来は通行止めになった。中山道の貫通する近江国神崎郡の市田村・三俣村には、街道筋ばかりでなく、村内の道筋にも竹矢来を構え、宿駅の入口と出口には大門を立てて、外番所、内番所などと厳重な警護体制がとられた。

近江国内の中山道での和宮の行路は、二二日に守山宿に泊まり、翌二三日は守山宿を出立して武佐宿でお昼、愛知川宿で泊まり、二四日朝愛知川宿を出立し、その日の柏原宿泊の後、翌二五日に柏原宿を発って美濃国へ入るものであった。

和宮江戸下向の行程は、丁吟京店から江州の小田苅本宅に連絡されており、輿入れ行列の愛知川宿通行にあたっては、警護の者に対して夜具その他の諸道具の貸出しが本宅へ指示された。和宮の愛知川宿泊の当日一〇月二三日には、京都からの送り人数二七五四人、幕府からの迎え人数二九一八人、彦根藩の警護その他の九八八人の総勢六七〇〇人余の関係者たちが、愛知川・中宿・沓掛・土橋・山塚の五ケ村に分宿し、多い家では一軒に数十人が泊まった。

この文久元年秋には、京都の両替商伊勢藤が休店倒産し、預金者の四〇人を超える近江商人が被害を受ける経済事件が発生するが、伊勢藤事件の対応については後述する。

6　天誅激化

文久二年（一八六二）二月一一日、江戸城で将軍家茂と和宮の婚儀が行われた。その前月一月一五日には、積極的に公武合体を進めていた老中安藤信正が、水戸浪士に襲撃されて負傷する坂下門外の変が起きたものの、公武合体を推進しようとする幕府と朝廷の間に入って発言権を強めたのは薩摩藩の島津久光であった。久光は、文久二年四月に入洛し、有力諸藩の衆議により公武合体を実現し、幕政改革を図ろうとした。

久光の意向とは別に、京都に結集した尊攘過激派は、文久二年から三年にかけて幕府側の人間と見なされた人々や貿易商人たちを、天に代わって国賊を殺す意の「天誅」と称して次々に暗殺していった。テロリズムが、大衆組織を持たない政治運動の手っ取り早い乱暴な手段であることは、洋の古今東西を問わない。天誅の最初は、文久二年七月二三日に京都の四条大橋に梟首された九条関白家家臣の島田左近であった。

この時期の尊攘運動には、開国以来の物価騰貴の下で困窮する都市住民への訴えが含まれていた。両替商、質屋、米穀商、貿易商などの不正奸曲を糾弾する張り紙や投げ文が横行した。そ

図7　和宮（『画報近代百年史』第一集より）

の言うところは、外国貿易に従事して巨利を得たとか、諸品の買い占めをはかって物価を釣り上げたというものであり、そうした貿易商人に対して、天誅による暗殺事件が多発した。

京都では、文久三年七月二四日、八幡屋卯兵衛の首が三条大橋のたもとにさらされた。その傍らには、添え札が立てられていて、前夜不在であったために難を逃れた丁吟京店の丁子屋吟三郎、布屋市次郎と彦太郎父子、太和屋庄兵衛については「追って誅戮を加えるもの也」と、追伐を宣言していた。

図8　禁門の変　元治元年（1864）（東京大学大学院情報学環所蔵）

この天誅脅迫を受けた「丁子屋吟三郎」とは、丁吟京店の店名前であり、実際の店預り人は、二代目吟右衛門の従弟、源治郎であった。幸い命を奪われることはなかったものの、丁吟京店では二三日夜押し入った五人の浪人のために帳場や商品を荒らされ、商品の縮緬に放火されて、五〇〇両余の被害を受けた。

その後八月には、交渉相手も不明のまま、吟三郎助命を嘆願した張り紙を出したが、何の反響もなかった。暗殺の恐怖は続き、またこの不慮の騒動が町内にかける迷惑を考慮して、京店は休店を余儀なくされた。

そこで、京店の仮宅を高倉通御池下ルに求め、吟三郎の除名と元の場所での営業再開を願って、諸方面へ働きかける過程で、尊攘派の政治結社学習院への一万両献金問題が持ち上がった。

7　禁門の変

文久三年（一八六三）八月一八日の政変によって、公武合体派の薩摩藩と会津藩の連携が成立し、尊攘派の三条実美ら七人の公卿と長州藩勢は長州へ退去した。しかし尊攘派はなお京都に潜伏して暗躍を続け、長州藩内では急進派の京都進発論が有力になっていった。この出兵計画は、元治元年（一八六四）六月五日、京都三条小橋の旅籠池田屋に集まっていた尊攘派浪士を、京都の治安を担当していた新選組が襲撃した池田屋事件によって、一挙に進展した。

この事件への報復のため、新選組を指揮した会津藩主の京都守護職松平容保を誅罰することを名分とする長州軍と、会津・薩摩を中心とする公武合体派軍の軍事衝突が、元治元年七月一九日の禁門の変（蛤御門の変）である。戦いは一日で終わったが、市内の大火災（どんどん焼き）は二一日まで続き、市中の焼失家屋は二万八〇〇〇戸にもおよんだ。

一方、弘化四年（一八四七）に公家の子弟の教育機関として建設された学習院は、嘉永二年（一八四九）に孝明天皇から「学習院」の扁額を受領し、京都学習院となった。学習院では、桜田門外の変以後、学問の合間に時事問題が論じられ、文久二年（一八六二）七月頃より朝廷と諸藩との折衝の場となり、京都における尊攘思想の温床と化していた。

文久三年二月、当時横行した張り紙・投げ文などが人心騒乱のもとになるとして、陳情建白の類を学習院で受理することになったため、尊攘運動の浪士たちはこれを利用して学習院へ頻繁に出入りするようになっていた。こうした浪士の行動は、当時の生活苦や社会混乱に対する不安や不満に応えるものとして、京都市民からむしろ支持される傾向にあった。

丁吟の京店吟三郎への天誅脅迫に対する助命運動は、丁吟側が風聞をたよって河原町の長州藩邸へ嘆願し、その指示によって学習院との接触が生じた。丁吟と学習院との間に立って献金一万両による解決案を斡旋したのは、醍醐家の家臣板倉筑前介であった。

学習院は長州の尊攘派と一体であり、丁吟の一万両は、八月一八日の政変当日、長州藩邸へ持参を命ぜられ、納金された。この政変後、学習院の関係者は長州へ落ちのび、九月一〇日にこの金は長州藩邸から丁吟へ預け金の形で返却された。このうち、三五〇〇両は学習院へ納付されたが、京店の元の場所での営業再開は実現せず、吟三郎（ことの源治郎）は所期の目的を果たせないまま、元治元年正月、小田苅で病死した。

丁吟京店は、慶応三年（一八六七）六月に仮宅の高倉通御池下ル亀甲屋町に、店名前を三文字屋万次郎に変更して再開店せざるを得なかった。一方で、献金問題は落着しないまま、成立したばかりの財政基盤の脆弱な明治新政府から納金請求に応じて支払われ、他の富豪とともに、吟右衛門は慶応四年（明治元年）四月、明治新政府の財政調達源である会計方御基立金御用達御用掛に任命された。

第47号
発行／特定非営利活動法人三方よし研究所　〒522-0004　滋賀県彦根市鳥居本町六五五―一　TEL〇七四九(二二)〇六二七　E-mail office@sanpo-yoshi.net　URL http://www.sanpo-yoshi.net/

新企画

〝おはなし近江商人〟出張講座始めます

いつでもどこへでも出かけます

わかりやすく近江商人のことを紹介します

三方よし研究所では、このたび、「おはなし近江商人」と題する出張講座を企画しました。なんとなくわかっているがもう少し近江商人の事を知りたい！「三方よし」はよく聞くがほんとうはどんなこと？近江商人はいつ頃の人？　何を売っていたの？などなど、そんなご要望にお応えできる「おはなし近江商人」の講座です。

詳しくは三方よし研究所事務局までお問い合せください。

お問い合わせ先
三方よし研究所
(sanpo-yoshi.net)
TEL.0749-22-0627
事務局：岩根順子

三方よし講座開催のご案内

小泉創業の地に学ぶ

毎年大好評の三方よし講座、本年は小泉グループ創業家「小泉重助」宅の訪問を中心に、愛知川地区の近江商人ゆかりの地の見学を企画しました。

日時　令和3年10月3日(日)
9：30 JR能登川駅集合
15：45 能登川駅解散

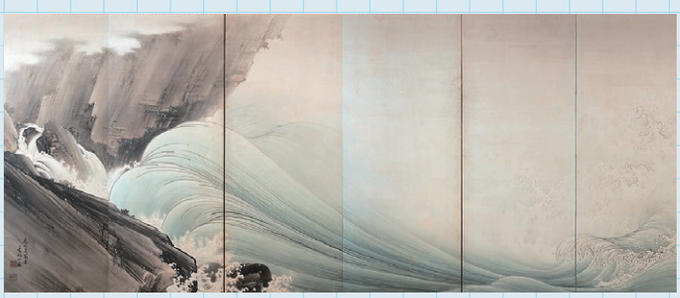
参加費　4,000円
当日のバス乗車、昼食代金を含みます。
能登川駅までの交通費は各自ご負担ください。

行程
・小泉重助家（東近江市五個荘山本）の見学と学芸員の解説
↓
・近江上布産業会館
↓
・愛知川ふれあい本陣の見学
（能登川駅からすべてバスで移動）

コロナウイルス禍につき今回は会員・賛助会員様だけが対象となります

近江商人と深いつながりの近江の画人
島﨑雲圃、山元春挙、邨松雲外

滋賀県立近代美術館（現滋賀県美術館）、彦根城博物館の館長を歴任された石丸正運編著の『近江の画人』（サンライズ出版）では、近江の画人の特徴として近江商人とのつながりについての記載が光る。本書は石丸さんの指導を受けた学芸員らの近年の研究が収録されているが、「商いと文化の伝播」という項目では、高田敬輔、島﨑雲圃、小泉斐、島崎玉淵、野村文挙、邨松雲外、塩川文麟、野口小蘋、野口謙蔵が取り上げられている。商家に奉公後に画家として大成した山元春挙や邨松雲外、野口家に嫁いだ伯母小蘋の影響を受けた謙蔵のように身内の影響を受けた人もいる。日野商人の先進性、経済力を基盤とした高田敬輔のネットワークは広範囲な商い基盤のあったことをうかがわせている。さらに門跡寺院や公家の御用を務め、京の各派の画人・文人との親交の深さが興味深い。作品の紹介とは別に近江商人の文化交流を知ることもできる好書である。


邨松雲外作「海浜図」6曲1双のうち（ツカモト資料館蔵）

てんびん棒

本年の総会では琵琶湖疏水遊覧を企画していたのだが、緊急事態宣言が発出され、運航停止となった。またも乗船の機会が遠のいたが、なんとも致し方がない。

オリパラも1年延期されたが、無観客という異例の中での開催。次第に政府の動向に疑念が募るばかりの暑い夏である。

世情不安定の中、思いがけない事態に遭遇した時、はたして先人たちはどのように対処したか、こうした事例があるはずだと思い、ご多用のところ当会顧問の末永先生に、特別ご寄稿いただいた。維新の時代、ちょうど大河ドラマ「青天を突く」の時代のことを本号ではご紹介いただいた。状況は異なるとはいえ、現代も多くの活動が大転換する中、はたしてコロナ収束した時点でどのように変化するのか、誰にも予測がつかない。確実に変わると予測できてもその変化が見えない。すがる思いが強いのか、昨今「三方よし」の経営理念に関するお問い合わせが事務局に多く届く。こうした追いかぜからの本号の発案だった。続きは年内発行予定号でご紹介させていただくので、もう少しお待ち願いたい。